

令和4年度 蒲田川流域溪流保全工工事における安全対策について

辻建設（株） 令和4年度 蒲田川流域溪流保全工工事

(工期：令和4年4月22日～令和5年3月31日)

現場代理人 ○^{ふるの}古野 ^{まさお}正夫

監理技術者 ^{みやだ}宮田 ^{たつや}達也

《キーワード》 ①健康管理

②架空線切断事故防止

③交通事故防止



1. はじめに

本工事は、蒲田川の支流である左俣谷と右俣谷の合流点下流に位置し、北アルプス南部の穂高岳や槍ヶ岳、笠ヶ岳などの登山拠点の一つである新穂高センターや新穂高ロープウェイがあり、多くの登山客や観光客が訪れる奥飛騨温泉郷の観光拠点である。

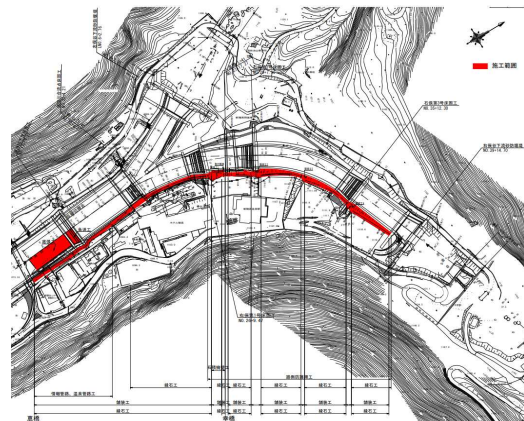
蒲田川は川幅が狭く宿泊施設等の保全対象が川岸に近接しており、土砂流失による被害の危険性が高い地区であることから、地域の山岳景観、親水性等に配慮しつつ、異常な流出土砂をスムーズに流下させるとともに上流域の流出土砂の抑制を図る土砂災害防止施設（溪流保全工）の整備が必要である。

本工事では左俣谷・右俣谷合流点から下流にある恵橋の上流までの区間において流路護岸工の改修と周辺管理用通路の整備を行う工事である。

本稿では、この工事において実施している安全対策について報告する。

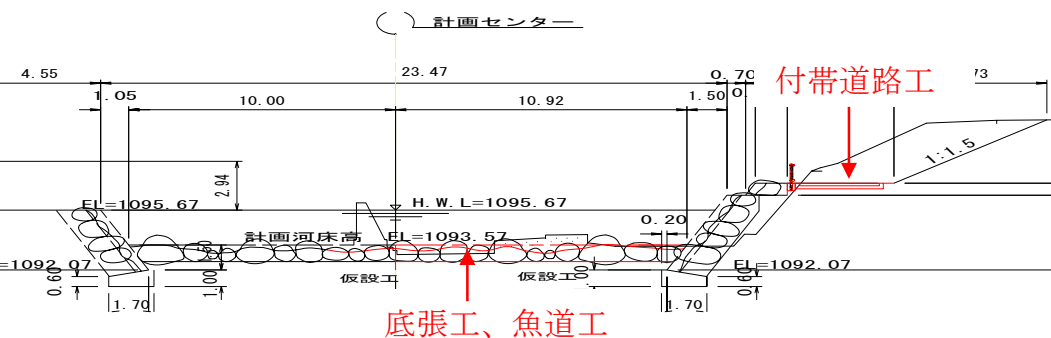


現場位置図



施工範囲

2. 工事概要



砂防土工	1式
法面工	1式
流路護岸工	1式
床固め工	1式
付帯道路工	1式
構造物撤去工	1式
仮設工	1式

3. 健康管理

【新型コロナウイルス対策】

新型コロナウイルスの感染も第6波、第7波と終息に終わりが見えず、いつ、現場で従事する作業員が感染するかわからない。現場事務所には抗原検査キット、マスク、アルコール消毒液を常備〔写真-1〕するとともに、作業開始前には『新型コロナウイルスチェックリスト』に検温、体調等について記録するようにした。〔写真-2〕



〔写真-1〕抗原検査キット、マスク等の常備品



〔写真-2〕チェックリスト



また、重機の操作レバーやダンプトラックのハンドル等はアルコール消毒を行い、感染防止に努めている。〔写真-3〕

〔写真-3〕ダンプのハンドル消毒

【乾燥室の設置】

濡れた雨具や防寒着での作業は体調不良を招く原因となるので、過年度工事で作業員に好評であった乾燥室を本工事でも設置し、健康保持に努めている。〔写真-4、5〕



〔写真-4〕乾燥室（外観）



〔写真-5〕乾燥室（内観）

【熱中症対策】

熱中症による災害を防止するため、現場休憩所に経口補水液やスポーツドリンク等の飲料水を常備〔写真-6〕するとともに、現場事務所の出入口に「みはりん坊」を設置して熱中症指数（WBGT）の危険度が確認できるようにした。〔写真-7〕



〔写真-6〕 経口補水液、スポーツドリンクの常備



〔写真-7〕 みはりん坊設置

4. 架空線切断事故防止対策

前回工事において架空線にバックホウのアームを引っ掛けて電柱を倒す事故があり、今回工事においても同じ場所を工事用通路として使用する。同じ事故を繰り返さないようにするため、高さ制限と「↑架空線注意」ののぼり旗を設置し、現場作業員だけではなく、生コンクリート等の運搬車にも架空線があることを分かるようにした。〔写真-8、9〕



〔写真-8〕 高さ制限設置



〔写真-9〕 のぼり旗（↑架空線注意）設置

5. 交通事故防止対策

【過積載対策】

過積載での運搬は道路や橋梁等の損傷、沿道環境へ悪影響が大きく、交通事故の原因となる。土砂等運搬するダンプトラックの荷台には積載制限シートを張り付け〔写真-10〕、オペレーターに積載ラインを超えて積まないように指導した。また、車両の側面に工事名を記載したステッカーを張り付け〔写真-11〕、第三者がどこの工事用車両なのかわかるようにすることで、運転手の意識向上を図った。



〔写真-10〕 積載制限シート



〔写真-11〕 工事用車両ステッカー



【左俣谷林道の歩行者通路設置】

現場事務所や左俣谷・右俣谷合流点へは新穂高センター前から恵橋を渡り、左俣谷林道を通行する。笠ヶ岳等左俣谷方面へ登山に向かう方は会話や周囲の風景に夢中になって後方から走行してくる工事用車両に気づかないことがある。また、紅葉シーズンになると周囲の駐車場に駐車できず路上駐車されて工事用車両（特に生コン車やダンプトラックの大型車両）の通行に支障をきたす恐れが考えられたので、左俣谷林道にカラーコーンとトラロープを使用して歩行者通路を設け、駐車禁止の明示を行った。〔写真-12〕



〔写真-12〕 歩行者通路設置状況

6. まとめ

工事は関係機関の皆様のご指導、ご協力をいただきながら施工中であり、これから最盛期を迎える。これまで以上に作業員全員で一致協力して安全に対して注意を払い、無事故・無災害で工事を完成できるよう努めていきたいと思ひます。